

発 達 (246~253)

- 座長 岡 山 禧 子・松 野 豊
- 246 幼児の言語発達 (その 2)
—保育現場での言語理解の発達—
東京成徳短期大学 ○岡 崎 比佐子
" 中 田 カヨ子
日本女子大学豊明幼稚園 前 典 子
- 247 幼児の言語発達に関する追跡研究 (第 3 報)
—有意味語出現にいたるまで
の言語活動の分析 (その 3)—
東京家政大学 加 藤 綾 子
- 248 母と子の対話における「コトバ」の機能
第 4 報「コトバ」の機能的分類—4 歳児の場合
東大阪短期大学 岡 山 禧 子
- 249 幼児におけるコトバの発達
—“同じ”の概念の機能分析を通して—
新潟青陵女子短期大学 斉 藤 貴 子
- 250 語の想起能力と構文能力との関係について
東北大学 ○松 野 豊
" 片 桐 和 雄
" 小 林 久 男
- 251 言語連想の研究
その 1 発達段階による連想反応語の分析
北海道教育大学 ○末 岡 一 伯
" 松 下 寛
- 252 日本語 2 字音節の有意味度と熟知度 (2)
—自由再生の発達—
佐賀大学 丹 野 真智俊
- 253 児童における文法の習得に関する研究 (I)
—文脈的般化 (contextual generalization) について—
東京教育大学 藤 友 雄 暉

I 全体的特徴

本部会で報告された 8 つの発表は、次の 4 つの方向に大別された。

1 乳幼児の言語発達の過程を、子と母の家庭生活における生の発語、対話とのかかわり合いから捉えようとして、実際に録音や筆記で発語を集録し、その資料を整理して考察しようとした研究 (247, 248)

2 幼稚園や保育所の幼児を対象として、幼児の一定の「ことば」に対する意味理解の程度を、実験的に (質問に答えさせたり、指示通り行動、操作を行わせ

る) 反応を調べ、幼児のことばの概念把握の実態を明らかにしようとする研究 (246, 249)

3 小, 中学生を対象に、語の想起、連想による反応結果と構文能力との関連 (250)、反応連想語の出現の型を発達段階的に特徴づけようとする研究 (251)

4 小, 中学生を対象に、無意味綴の実験語を作製し、これを用いて文法習得と文脈的般化の状態を調べようとする研究 (253)

II 討論の内容

岡崎ら (246) の発表に対しては、実験の方法について、幼児に呈示する問題の選択法、問題の教示の仕方、幼児の反応の正誤を判定する際の基準の設定の仕方の三点について、その妥当性が論じられた。先ず、斉藤 (東教大) から、ならべる、かさねる、あつめる etc、の問題選択の根拠を質したのに対し、幼稚園の生活において、園児が特によく経験していると思われる行動と結びついた「ことば」を選んだという答えがあり、次いで、横山 (愛知県立大) が問題の教示法について、ただ積木を与えて「ならべなさい」では、縦、横、円、半円などの並べ方でも制限はないはずで、プラス反応、マイナス反応の判定は困難である旨指摘したのに対し、「ならべてごらんない」という指示に対してすぐ反応できず積木を持ったままだったり、他の行動をする子には、更に「まっすぐにならべてごらんない」と指示したこと、幼稚園では「ならびなさい」は常に「まっすぐならぶこと」と習慣的に理解され、実行されているので、「ならべる」も「まっすぐならべる」と理解をされていることを前提とした旨答えた。これに対して「ならべる」は「まっすぐ」と「ならべる」の二つの意味を持つことになるので妥当でないとして、より適切な問題とその教示法の再考が示唆された。なお問題に対する幼児の反応の正誤判定基準について、明確さを欠く点 (例えば、ならべるのマイナス反応はどんな状態のときか等) が指摘されたのに対し、岡崎 (東京成徳短大) から具体的に本実験で設定された大体の基準の説明があったが、今後のこの種の研究方法についての基本的な姿勢を問われたものと考えられる。

加藤 (247) の発表に対して、横山 (愛知県立大) から、家庭に入りこんで 1 か月 1 回 1 時間の子どもの発話の録音や観察記録が取られることについて、母親が意識して子どもにことばを教え込むことはなかったの

かという質問があり、その問題については被験児の母親が気分の安定した素朴な人柄なので全く心配はなかったと答えた。さらに、子の発話を有意味語として判定した基準についての質問に対しては、子どもが表現しようとしている意味が少しでも分るものは全部有意味語としてすくい上げた旨回答があり、更に母のこたばを模倣した発話の調音が次第に整って理解され易くなる過程を、具体的に事例を説明しながら補足した。

岡山(248)の発表に対して、斉藤佐和(東教大)より、2~4歳の各年齢間の各場面別、項目別の比較はなされたかという質問があり、全部比較してある旨答えた。さらに、食事場面の対話の占める割合が大きいという報告だが、その食事場面をはじめ、他の場面についても縦の項目別の比較検討を試みてはどうかという示唆があった。

斉藤(249)の発表に対しては、実験方法の根底にある問題として「おなじ」の概念を規定する因子についての疑問が提示された。藤友(東教大)から、実験の容器のコップの目盛を三色にし、その順位を一定にできなかった理由が問われたのに対し、色を用い、しかも順位を変えたしるしをコップにつけることによって、子どもの注意の方向なども同時に考察できると考えていたが再考の必要がある旨答えた。さらに、コップの線の色順を統一するか、一色にした方がよいこと、また「おなじ」の意味が不明確であること、連続量と分離量の観点からも方法上の問題があることが指摘された。これに対して斉藤は「おなじ」の因子の不明確な混り合いを認めたが、本実験では、かえって、それら因子の混り合いを利用して、子どもの反応をそれぞれの角度から分析しようとする意図もあった旨答えた。しかし、「おなじ」の概念の持つ因子が決して単純なものでないことが次々と指摘され、荒木(宮大)は「おなじ」の概念の属性を統一して実験しないと「何がおなじ」なのか不明になると述べ、天野(九大)も「おなじ」の概念の次元をもっと明確に選定して実験しないと、子どもの反応に次元の混同が起ると指摘した。これに対して、コップの大きさや形の認識、量の保存

と共に手順や操作までも含めて「おなじ」の概念を適用したという回答があったが、「おなじ」の意味の多元性を検討し、今一度、規定因子を整理して実験方法を工夫すべきだという意見が多数を占めた。

片桐ら(250)(松野は当日欠席のため片桐が発表)の発表に対しては、梅本(京大)から単語想起の具体的な方法が質問されたほか、結果として、c/b(b:文の数、c:文節数)の値の大きい方が構文能力が劣ると判断したのかという質問に対して、そのようには判断せず、自由作文による文章そのものから判断した旨答えた。また村越(東大)からの、各類型例の「絵の説明」の結果から構文能力を判断することができるかという質問に対して、構文能力というよりも、事物説明タイプと状況説明タイプに分れる旨答えられた。

藤友(253)の発表に対しては、無意味綴りの単語で文章としての文法の文脈的般化を測定しようとするこの是非を中心に議論された。天野(九大)は、無意味綴りで実験し、子どもに文のようにと教示しても実際には文でないの、そこから文法の般化に言及するのは無理であると指摘。吉田(九大)も同様に仮に設定した無意味綴りが全く意味を持たないことから、この実験に疑問を感じる旨述べた。これに対して藤友は無意味語に無理があることは承知しているので、今後は有意味語「太郎は犬と走る」等を使用することも考えていると答えた。更に小野寺(東北大)からも有意味語での実験の示唆があり、なお、この方法では、幼児の言語習得システムを知るのが目的ならば異質なものがでてくる恐れがあると考えられるので、もっと生の資料から出発すべきではないかという意見も出された。

丹野(252)と末岡ら(251)の発表については、特に質疑はなかった。(時間の関係もあって)

以上、この部会での討議の中心は、殆ど実験方法の妥当性、信頼性の問題に集中した感があり、研究目的に沿って、より慎重な手続、方法を検討するべきだという意見が多く、種々の角度から活発に論じられた。

(岡山禧子・末岡一但)

発 達 (254~262)

座長 山 田 英 美・柴 田 薫
254 幼児の相互関係についての一考察
(その1) 継続的遊戯場面における2幼児の相互
関係の分析

東京教育大学 氏 森 理 子

255 幼児の相互関係についての一考察

(その2) 継続的遊戯場面における子どもと大人の
相互関係の分析

東京教育大学 清 水 知 子

256 乳幼児のアタッチメント行動に関する研究(1)